九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州の漢学者たち

町田, 三郎
九州大学名誉教授

https://doi.org/10.15017/18232

出版情報：中国哲学論集. 35, pp.39-54, 2009-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

九州の漢学者たち

町田三郎

一

明治末から昭和初年にかけて漢学界で巾広く活躍した久保得二、号天隨（一八七五～一九二四）に『日本漢学史』『近世漢学史』の著作がある。漢学の歴史を考えるときこの二作のほかにも内藤湖南の『近世文学史論』や井上哲次郎の『日本陽明学派の哲学』『日本朱子学派の哲学』『日本古学派の哲学』などがある。ただここで採りあげて論じられるのは江戸時代の学術であってわが国の全ての時代をカバーするものではない。漢学史の専家である三浦叶はいう、わが国の「上代から近世まで通じて行われたものは僅かに久保得二」[1]の二著に過ぎないと。

久保は漢学史を三期に分けて記述する。第一期は漢学講習時代、第二期宋学輸入時代、そして第三期諸学競合時代。第一期は応神天皇十六年、はじめて漢籍が伝来してから鎌倉幕府創立に至るまでの約千年。この間隋唐との交流を通じて諸般の体制も整い、学制の面では大江や清原の博士家が代々学問を独占的に管掌する。講習するところは訓詁に止まっていた。第二期に至り鎌倉時代から戦国時代にかけて、宋元に来往する留学僧が新鋭の朱子の学説を持ちこむが、その講習は京都・鎌倉の五山の僧侶に限られ学問が広く社会に行きわたることはなかった。ところが第三期に至り戦国の争乱は各地に及び、社会の混乱はその極に達した。とりわけ細川勝元と山名宗全が京都の東西に陣を構えて争いあった、いわゆる応仁の乱は京都を焼け野原にし、縉紳僧侶らは生活の場を失い、流離してつてを求めて地方諸

侯の有力者に依拠することとなった。とりわけ学僧は対外交渉等に役立つことが多く優遇された。実はこれが結果的に文化を京都から地方に拡散広布する因由となった。山口の大内氏は財力に富み流離の学僧の群居するところとなった。薩摩の島津氏、土佐の長曽我部氏また然りである。やがて戦国の動乱も終熄し、織豊から徳川の世となり、家康の好学も手伝って幕府に人材が集中する。明清の学術も伝来し、地方にも俊才が出現して、朱子学、陽明学、諸子の研究等々、いよいよ学問は競合の様相を呈することとなった。

二

九州儒学の開祖というべきは、長門の人桂庵玄樹（一四二七～一五〇八）である。九才で上京し南禅寺に参じ、その法を嗣いで聖一派の人となった。はじめ大隅の正興寺に住し、応仁元年遣明使に従って入明。北京で憲宗皇帝に見え、ついで蘇州・杭州に留まること七年。四書五経の朱子新註を学び、文明五年帰国。しかし応仁の乱後の荒廃した京都を避けて石見、周防、長門、さらに文明八年豊後・筑紫に入り、九年菊池重朝に招かれて肥後に下り、朱子学を講じる。翌十年薩摩に入り竜雲寺に寓したが、島津忠昌に招かれてかれが創立した桂樹庵に住し、大いに朱子学を講じる。十三年、伊地知重貞とはかって『大学章句』を刊行する。これはわが国における朱子新註開板の第一である。またこの折り訓点を工夫した『桂庵和尚家法倭点』を創案して朱子学のいっそうの普及につとめる。ついで日向に赴く。この間薩摩と日向を往来して朱子学を講じ、いわゆる薩南学派の基礎を形成する。文亀二年鹿児島の伊敷村に東帰庵を建て、隠棲して講習にはげむ。玄樹の講義は徹底していて四書は朱子の『四書集註』、『易経』は朱子の『周易伝義』、『書経』は蔡沈の『書経集伝』、『詩経』は朱子の『詩集伝』、『春秋』は南宋胡安国の『春秋胡氏伝』、『礼記』は陳澔の『礼記集説』によった。旧注が通用していた当時においては注目すべきことであった。

島津氏に招かれて三十余年、広く朱子の学説を紹介し、あわせて新しい訓点法を創始して学問の普及につくした功績は大きい。この学説をつぎ拡充するものが文之及び如竹である。

玄樹の学三伝して飫肥の人文之玄昌（一五五五～一六二〇）に至る。かれは年十三、龍源寺の二州字一翁に師事する。一翁は桂庵の孫弟子に当る。人を教えるのに弟子それぞれの資質に応じた教育を施し、少年文之には儒書の記誦訓詁に専心させた。この時文之は桂庵の学と邂逅する。一扇は文之三十八才の時に没し、いま一人の師である帰化人黄友賢も五十六才の時に没した。西村天囚は文之の学は「訓詁を一翁に受け、義理を友賢に学んだ」[2]と『南浦文集』の読後感に述べる。

文之は薩摩の島津義久に寵遇され、島津家の政治顧問となり、義弘・家久と仕え、文書作成、明や琉球との外交、地域の教化につとめる。傍ら桂庵の四書訓点の誤りを正してその業を完成する。

文禄二年、渡明に失敗した藤原惺窩が土地の僧から文之の新註倭点を示され、これが後の惺窩点へと発展したとする説がある。ことの眞偽は不明だが、江戸のごく初期に文之点は九州の地である程度広がっていたと考えてよい。

桂庵、文之の著書を刊行して四書をいっそう江湖に伝播したものは、如竹散人（一五七〇～一六五五）である。如竹は屋久島に生まれ、一時は法華の僧となるが、長じて京都の本能寺に住した。のち薩摩に帰り文之和尚に師事して程朱の学をうける。長く藤堂氏に仕え、のち琉球に遊び、また大阪に学を講じる。安永十四五年のことである。のち鹿児島に至り、太守光久の師となり、藩士に教授する。明暦元年没。

藤堂氏に仕えて江戸にいた頃、如竹は出版に出精する。寛永元年に桂庵の『家法倭点』を印行し、その翌年に文之の随筆集『南浦文集』を印行、同年『四書集註文之点』、同じく四年に朱子の『周易伝義』を刊行する。これらは先人を顕彰し、あわせて朱子の学問を広める事業であった。西村天囚はいう。

「徳川氏に至りて『四書集註』が士人の普通読本たるに至りし功績は、如竹刊行の力与りて多きに居るを疑わず」[3]

三

戦国末期の社会秩序の崩壊、礼教の頽廃、人心の不安を匡救して社会の改造を意図する為政者は、時代の声として

儒学の奨励に熱心であった。信長・秀吉、とりわけ家康は学問好きでかなりの学殖を蓄えていた。慶長五年には藤原惺窩を招いて経史を講ぜしめ、八年に林羅山が学生らに『論語集註』を講ずるや博士船橋秀賢から勅許なくして書を講ずべからずと横やりが入り、これを朝廷に上奏する事件が起きた。廷議は大将軍家康に意見を求めた。家康は笑って「匹夫の道を講ずるは、寧ろ賞すべきである」と答え、秀賢の議は却下された。古来からの博士家による学問の独占はここに破れ、学問は一般人士に解放された。

徳川三百年は三期に分けて考えられる。

第一期　初代家康から七代家継まで

第二期　八代吉宗から十代家治まで

第三期　十一代家斉から十七代慶喜まで

第一期は徳川三百年の文運の開基で、朱子学の勃興を特色とするが、その功は藤原惺窩とその一門、とりわけ林羅山一家の活動に帰せられる。林家の羅山、鵞峰、鳳岡らは家康をはじめとして四代の将軍に仕えて重用される。林家の私塾はやがて昌平坂学問所として旗本の子弟の公許の学塾となり、もっぱら朱子の学説を信奉し、秩序の尊重を旨とした。山崎闇斉のグループほどに厳格極端ではなかったが、朱子の学説に反するものは一切排除した。

闇斉とほぼ同時に京都から木下順庵が登場する。はじめ松永尺伍の門に入り、のち加賀の前田侯に仕え、やがて綱吉に招かれて幕府儒員となる。その門下から新井白石、室鳩巣、雨森芳洲、祇園南海らが現われる。かれらは実践的な学問の才に秀れ朱子学の社会への定着に力を発揮した。とくに一般社会の軽佻浮薄の風俗を忠厚篤実の風に導いた功績は大きい。

この間にあって惺窩、羅山、後藤の訓点とともに文之点が僻遠の薩摩の地に生れ、朱子学の普及に力を尽くしたことは注目されてよい。

第二期を代表する人物は、伊藤仁斎、東涯父子及び荻生徂徠である。十七、八世紀の交を活躍期とする。仁斎は古学を唱導して古義学の祖となり東涯はこれを紹述し、朱子学に対抗する一大勢力を築きあげる。仁斎は朱子の尊重す

る大学等の書は孔子の遺書ではないと喝破し、先入観を捨てて古代の言語や思想を理解すべしと説き、その成果として『論語古義』を著わす。『論語』の前半十巻を上論、後半十巻を下論と分別し、その成立に時間差とグループの違いがあることを立証する。この書はわが国における独創的な中国研究の嚆矢である。

荻生徂徠も朱子の所説に疑問を持ち、古代の言語、文物の正確な理解をベースとして研究をすすめるべきだとする。名著の誉れ高い『論語徴』はこの立場から生み出される。徂徠は人となり大度で、子弟にも寛容であったので一門は隆盛をきわめた。しかし寛宏の気はやがて放弛の気をよび、太宰春台、服部南郭以後は、詩文に偏して学界に声威を失うこととなった。

第三期の将軍家斉以後、江戸も中末期に至ると従来の林家を頂点とする朱子学派と、仁斎・徂徠の古学派との中間にそれぞれ経義の復興を名としながらもその方法論を異にした諸学派が継起し競合する。従来の学術の墨守の陋を去ると称して、考証、折衷、独立、また陽明の学へと向う。いわば学問の氾濫状態ともいえるものであった。ただこの頃、明清の著書も輸入され、その刺激もあって一般的に学問水準もあがり、多様な学派と優秀な人材の登場を迎えることとなった。

また大阪の富裕な五人の町人によって懐徳堂が創建され、従来の武士中心の学術界もようやく町人や農民出身者を交えるものとなり、さらに各藩に藩校が設立され、都市の町々に寺子屋も生れ、学問教育は広く社会に浸透普及していった。

四

古来から九州の地は、平戸、長崎をはじめ博多、坊の津と海外への窓が開け、公私にわたり人及び物の往来するところであった。とりわけ長崎は、鎖国後も公許の貿易港として栄えていた。従って異国の文物、たとえば明清の研究書の輸入もこの地からはじまるわけで、九州はこの点新来の学術研究には便宜の地であった。それにもかかわらず江

戸の初中期に九州人の活躍する姿は乏しく、戦国末以来の桂庵一党の存在が注目されるばかりである。なぜか。この時期学問はなお京都、江戸に偏在し、やがて大阪、名古屋に拡がり、少しく遅れて文化の波涛はようやく九州に至ることになるからである。

伊藤東涯に「関西の巨儒」とたたえられた安藤省庵（一六二二～一七〇一）は福岡柳川の藩士。長じて京都で松永尺伍に学んで朱子学を身につけ帰藩して藩儒となり、子弟の教育に任じる。時に明の儒者朱舜水は明の光復を謀って幕府に援助を期待し長崎に亡命生活を送っていた。省庵はかれを訪ね師事すると同時に己の俸禄二百石の半分を贈ってかれの窮乏を助けた。このこと学界の佳話としてよく知られる。のち朱舜水は江戸に上り水戸光圀に見出され賓師として迎えられる。

省庵の業績として朱子学入門書『学蔀通弁』の訓点づきの刊行があり、著書に『初学心法』『三忠伝』などがある。比較的早い時期にその名が挙がるのは、熊本時習館教授の秋山玉山（一七〇二～一七六三）で、かれは林鳳岡に師事し、漢唐の古注と朱子の新註とを併用する方法を身につけ、同時に徂徠の古学をも取り入れる。これが後年古義を主として新註を併用する折衷学を生み出す。藩主細川重豪に重用され、参勤交替で江戸詰の折りには服部南郭らと詩酒の交わりをもった。詩才にも恵まれ「髑髏杯」の秀作がある。宝暦五年、藩校時習館の創立とともに督学となる。弟子に片山兼山、古屋昔陽、藪孤山らがいる。

藪孤山（一七三五～一八〇二）は肥後の人。二十三才で江戸に遊学し、西依成斎らと交わる。帰藩して時習館訓導から三十二才で教授。館に講習討論科を設け学風の刷新を図る。四十一才京摂に遊び、中井竹山、頼春水らと交わり、『崇孟』出版。また薩摩に遊ぶ。館の講義では仁斎、徂徠を斥け、ことに徂徠を排撃した。『崇孟』は太宰春台の『孟子論』を駁撃したものである。館の学風は秋山玉山時代詩文に偏していたとしてここに程朱の学を導入する。以後学風は一変して朱子学中心となる。

玉山も孤山もつとに江戸、京阪に遊び当時の名士と親交をもち、詩文にも堪能で、中央に知られた学人であった。時習館は全国の藩校の中でも歴代充実した教授陣を誇っていた。教科は四書五経、史漢等であるが、館独自の教本と

して『孝経』と『管子』中の「弟子職」篇を抜き出して合本とし、学生たちに「誦経」させた。父子・師弟間の序列、あり方を重視してのことで、「弟子職」篇への注目は珍しい。

肥後益城の出身に松崎慊堂（一七七一～一八四四）がいる。父の意志によって薙髪し仏門に入るが十五才江戸に出奔。浅草鳥越の称念寺に投じ、住職玄門の世話で還俗。十九才で林家に入門、佐藤一斎と学才を競った。三十一才掛川藩藩学教授。文化十二年致仕し渋谷羽沢村の石経山房に隠棲し学問に専念する。天保十三年には将軍家慶に召見される。慊堂ははじめ昌平黌で朱子学を修めたが、考勘学の狩谷棭斎を知り、その人柄と学殖とに敬服し交わりを深め、棭斎とともに漢唐の注疏や『説文』の研究に没頭する。慊堂がもっとも力を注いだのは「縮刻十二経」の出版であった。一体中国の『周礼』や『詩経』といった経典の標準となるものは、漢以来おりおり石に刻まれ建てられたいわゆる「石経」である。唐は従来の諸石経を参考して基準的な「開成石経」を建立した。ところが南宋に至り朱子学が興り古学を批判し、あまつさえ経文の文字を恣意に変更するに及んだ。明代はことに激しかった。従って後世の学者は、漢唐の由緒ある経典の正字を知ることができなくなった。是に於て慊堂は開成石経を研究縮刻して唐代の旧に復し、これを基本に経学の研究を押しすすめようとはかった。この事業は天保十二年に完成する。本文三十五冊、考證六冊、合せて四十一冊の大著作であった。

渋谷の石経山房に籠って石経の研究に没頭するころ、慊堂の名声は四方に伝わり、学問好きの諸藩の公子や若い学徒の訪問が絶えなかった。安井息軒や塩谷宕隠もしばしば訪ね慊堂の事業を手助けしつつ己れの学業の資としていた。これらのこと『慊堂日録』にくわしい。

九州は長崎という海外への窓口を擁しながら、新来の書物などは九州を素通りして江戸や大阪に集められていた。若い日安井息軒は杵築藩出身で大阪で家塾を経営する篠崎小竹の門に学ぶが、その実眞の目的は小竹の所蔵する大部の書物を借覧することにあった。小竹は書家としても知られ、財に富んで蔵書の多きを誇っていたのである。当時考証家として知られた太田錦城は医家の多岐桂山一家の蔵書一万余巻を頼りに研究し、近藤重蔵は幕府の紅葉山文庫に勤めてその蔵書を利用し、文字学の狩谷棭斎は裕福な商家の出で本名津軽屋三右衛門。要するにこの時代、個人蔵書

は医者の家筋か富裕な商家に限られていたわけで、多くの書物をみ学びたいと思うものは必然的に江戸や大阪を目ざすことになる。

こうした状況の中で特殊な文献に頼るわけではなく、ひたすらに思索を重ね、最終的に己れ独自の世界を構築する秀れて独創的な人物も出現する。

内藤湖南は前輩の言に聞くとして「三百年間、その一毫人に資る所なくして、断々たる創見発明の説を為せる者、富永仲基の出定後語、三浦梅園の三語、山片蟠桃の夢の代、三書是れのみ」（近世文学史論）[4]という。

三浦梅園（一七二三～一七八九）は国東富永村の人。「三語」とはかれの著作『玄語』『贅語』『敢語』をさす。梅園は十六・七才の頃杵築藩儒綾部綱斎、中津藩儒藤田敬所に師事。二十三才、長崎、太宰府、熊本を旅して見聞を広め、二十八才伊勢参宮を果し、晩年に長崎再遊。このほかには郷里を離れることはなく、再三の諸侯の招請も固辞して読書と思索に専念する。

三十才ころに「気」の思想に着目し「玄論」と題する小論を書く。「玄」は中国思想における根源的存在である。以後この「玄」を中心に厳密に記述される自然的世界の構築を試みて苦斗を続ける。二十三回の改稿をへて主著の『玄語』が完稿する。それは陰陽と易の理論にもとづいて究極の「玄」に辿りつく自然哲学体系の著作で、ここに至りつく論理を「条理」とよび、その認識の方法を「反観合一」とよんだ。

『玄語』執筆の副産物としての『贅語』と『敢語』の三部を『梅園三語』という。このほか作詩法を述べる『詩轍』、経済に関する論考の『価原』など多方面の著述を残す。

寛政元年、沈黙深思六十七年の生涯をとじる。

先入観にとらわれず自由な目で世界をみるものに梅園の流れをくむ日出藩の帆足万里（一七七八～一八五二）がいる。父通文は家老を勤め、三浦梅園、脇愚山らと親交があり、また詩文をよくした。万里は寛政三年十四才の時から八年間脇愚山に学び、同十年には祇役の父に従って東遊。大阪では、中井竹山、皆川淇園に謁し、日田では広瀬淡窓、博多に亀井南冥を訪ね教えを請う。以後淡窓や南冥の長子昭陽と厚誼を結ぶ。翌年再び東遊。村瀬栲亭に会いまた淇

園を再訪。多くの知名士と交わりさまざまな知識を吸収する。文化三年、三十代で藩学教授として教育に従事する傍ら家塾で経書を説きまた日用の学を奨励する。同十年ころから藤林淳道の『訳鍵』を唯一の手がかりに和蘭語を独習。天保三年父の跡をついで家老職につき藩政の改革に実績をあげる。六年家老を辞し家塾を再開。十三年日出郊外に「西崦精舎」を建て、子弟に経書はもとより諸子百家、医学、蘭学等を巾広く教授する。多面的総合的な学門の修得を目ざしてのことで実証的合理的な発想の尊重は、梅園、脇愚山を継承するものである。門下に岡松甕谷、米良東嶠らがいる。著書に『入学新論』『東潜夫論』『医学啓蒙』等々があるが、近代科学の啓蒙書ともいうべき『窮理通』の評価がとりわけ高い。『帆足万里全集』二巻がある。

一七〇〇年代後半から一八〇〇年代の初頭を飾る学者は、松崎慊堂と佐藤一斎である。慊堂は漢唐の古学を専攻し、一斎は朱王兼採の学を治める。慊堂の門から安井息軒、塩谷宕隠が出、宕隠は文章をよくする一方時の政治に精通し、息軒は漢唐、清儒の考証を好みまた仁斎、徂徠に出入する。一斎の門に朱学の安積艮斎・大橋訥庵がい、王学に山田方谷、吉村秋陽らがいる。要するに文化文政から嘉永安政の間には朱子学・陽明学・古学・考証学が並びたって学界を大いに賑わしていた。これに加えて独立派の三浦梅園や批評派の富永仲基、折衷派の細井平洲らが混り合って、学界は華々しくもあったが、一面では無秩序状態ともいえる様相を呈していた。こうした状態を時の老中松平定信は憂い、社会の安定を求め、その理念を朱子学に見出し、手始めに昌平黌の改革をはかり、柴野栗山を登用する。やがて寛政二年「異学の禁」を発し、昌平黌は「正学」即ち朱子学に専念せよと諭達し、その後古賀精里、尾藤二洲を儒官に採用する。いわゆる「寛政の三博士」の登場である。

三博士の一人古賀精里（一七五〇～一八一七）の家は代々佐賀藩に仕える下級武士であった。精里は早くから学問にはげみ藩主治茂に見出され、二十五才の時京、大阪へ遊学を命じられる。はじめ闇斎派につらなる西依成斎に学ぶが、のちに大阪で中井竹山、尾藤二洲らと交わり、当時盛行する徂徠学派に対抗して朱子学派の興隆を目ざす。帰藩後藩政改革に参与しまた藩校弘道館の教授として儒学の普及につとめる。寛政三年、藩主に従って江戸に上り、幕命によって昌平黌に講義する。藩臣にして昌平黌に講じたのは精里が最初である。また異例の抜擢をうけて佐賀藩士か

ら幕府直参となり、儒員、そして七年博士。

精里は文を能くし、その文は雄偉富贍、気格高古と称される。『精里全集』『精里文鈔』がある。

長子は穀堂。佐賀藩に仕える。次子は洞庵、昌平黌教授に任じ父の跡をつぐ。

安政異学の禁は各方面に多大の影響を与え大きく時代の流れを変えることとなった。朱子学が正学とされ勢いを伸ばしたのは当然のこと、詩文も詩は唐詩から宋詩へ、文は古文辞から唐宋八家の愛好へと移っていった。当然これに反発する儒者たちもいたが、大きな痛手を受けたのは徂徠学派であった。

五

福岡の学問は、貝原益軒と亀井南冥・昭陽父子及びそれぞれの学問所、すなわち益軒系の朱子学派による東学問所修猷館と南冥系の古学派による西学問所甘棠館の設立とその盛衰につきる。

貝原益軒（一六二〇～一七一四）は、祖父の代から黒田藩に仕え、父寛斉は藩の裕筆であった。しかし父の転職、浪人とともに益軒は幼少期を町内、農村と転々とし、その折りの体験が後年の「民生日用の学」に生かされる。十九才で二代藩主忠之に仕えるが怒りに触れて浪人。翌年光之に出仕。やがて藩命で京都へ遊学し、山崎闇斎、松永尺伍、木下順庵、中村惕斎、向井元升らの一流の朱子学者と交わり研鑽を積む。帰藩後は藩主、世子の侍講となりまた藩士に教授した。かれは旅行マニアともいうべきで京都、江戸、長崎へ再三おもむき、折から元禄前後の商業経済の発展に伴って興起した経験主義・実証主義の学風に強い影響をうけ、これを自らの学問のさまざまな分野に発揮した。儒学の面でははじめ朱子の学徒として出発するが、しだいにその観念性に疑問を抱き古学派の堅実さに傾斜を強め、晩年には『愼思録』『大疑録』を著わし、また自らの体験を加味した『養生訓』を書く。一方『豊前紀行』等旅行記も十種近く発表する。そこでは地方の景観美とともに民俗や産業経済の実情を平易な文章で活写し、この時代の旅行ブームや新奇を好む風潮ともあいまって大いに江湖に歓迎された。

天明三（一七八三）年、朱子学派で藩儒筆頭の竹田定良と古学派で御納戸組儒医の亀井南冥に同時に東西学問所設置と藩士教育の公命が下される。こうして福岡藩の藩校は全国でも珍しい二本立ての、しかもそれぞれ立脚地を異にした学問所がスタートする。

修猷館館長の竹田定良は代々藩儒筆頭三百石の名族。藩儒となった初代の定直は、その父が二代藩主忠之の夫人と従兄妹の間柄にあり、しかも益軒の高弟としてつとに著名であった。人柄も温恭篤実、益軒の著述の校正、清書に多大の貢献があった。自身の著書に『四書小解』『孝経便蒙釈義』等があり、藩務に関するものに朝鮮通信使との『藍島筆語』『黒田続家譜』『新続家譜』があり、多才で天文和算にも通じていた。定良はこの定直の曾孫に当っていた。従ってその家筋からいっても新たに設立される学問所の責任者に推されることはごく順当のことであった。そして以後かれの子孫・門弟が代々館の代表をつとめる。

修猷館の教育方針は学規の第一条「孝悌忠信・礼儀廉恥」を根本とし、道義の尊重を高く掲げる朱子学を中心とするものであった。天明四年二月六日に修猷館は開校する。このとき定良は『論語』学而篇の「弟子入則孝」について講演する。これより先き二月一日に西学の甘棠館は落成し開校する。この折り南冥は『論語』述而篇の「文行忠信」章をベースにしてかれの抱懐する学問論、すなわち学問と政治との一体化を声高く論じる。塾生は修猷館が六百余人、甘棠館が二百人余。入学資格は士分の子弟が十一才になると入学を義務づけられ、医師、神官の子弟にも入学が認められた。東西いずれの藩校を選ぶかは任意であった。しかし東には上士、西には下士の子弟が多かった。

西学問所甘棠館の館長亀井南冥（一七四三～一八一四）は、布衣から起った。父聴因は古医方の町医であった。南冥は幼少期から古学派の肥前の僧大潮に学び、二十一才のとき朝鮮通信使と藍島で詩文の応酬をして名を挙げ、ついで永富独嘯庵に師事して古医方と徂徠学との骨法を修得する。三十五才のとき十五人扶持の儒医に抜擢される。その後『半夜話』『肥後物語』を書いて政治政策案を当路に献上し認められ、さらに藩命によって甘棠館を主宰する。

東西の学問所が併置されてしばらくの間は、競争関係にあったものの表立って反目しあうことはなかった。しかし南冥の生来豪宕不羈で「物ニ克ツニ勇ニシテ、己レニ克ツニ怯」[5]の性分ではいずれ定良らとの衝突は免れなかった。

心の底では南冥は定良を「道学者」と決めつけ、定良は南冥を「古文辞の徒」「詩文の学」と貶めていたからである。

寛政四年七月、突如南冥は退役処分となり終身禁足を命ぜられる。理由はさまざまで、修猷館との反目、南冥の攻撃的な態度、藩士の嫉視等が挙げられるが、要は前々年の幕府が下した「異学の禁」こそ主因であった。南冥五十才、長子昭陽二十才。昭陽が家督をつぎ西学訓導の地位につくが、塾生は離散し館はさびれた。

南冥廃黜後の一年、主著の『論語語由』が完成する。「語由」とは「聖語」の由って出ずる所を明らかにし、種々の臆説を排して『論語』本来の意味を吟味、原初の正しい姿にもどす作業をいう。昭陽はこの労作を「天、わが先考を生みてこの義明らかなり」(『語由述志』)とたたえる。亀井一門の学の精髄であった。

ただこの『論語語由』が広く世間に知られるのは、秋月藩主黒田長舒の好意と英断とによる完稿後十三年たった文化三年の出版によるものであった。わが国の『論語』研究で評価されるのは、伊藤仁斎の『論語古義』荻生徂徠の『論語徴』だが、これらをついで『論語』の原初の姿をさらに明らかにした名著として『論語語由』が挙げられる。

南冥は閉居すること二十二年、文化十一年失火によって焼死。建造物すべて焼失。藩議は甘棠館の再建を許さず、教員の儒業職も停止。昭陽も一介の下級武士として城代組平士に編入される。かくして西学問所甘棠館はわずか十五年でその命脈を絶たれる。

南冥の晩年は万事に逼塞不遇であった。昭陽とて同じ事であったが、かれは境遇に負けずひたすら経学研究に打ちこみ卓越した業績をのこす。しかし当時、南冥父子の著述は禁書同然で、その著作の多くは未刊のまま弟子や一部の識者に伝えられるに過ぎなかった。

昭陽の学問は「経学」研究の一点にしぼられる。その代表作の一つに『尚書考』がある。年譜によると享和三(一八〇三)年に『尚書考』三巻を作るとあり、次に文政八(一八二五)年『尚書考』四巻を作り、さらに天保二(一八三一)年『尚書考』十二巻全備とある。つまり『尚書考』は昭陽三十一才の時から修正補訂を重ねて二十八年の歳月を要して五十九才で完稿する息の長い研究であった。

昭陽の学問の特色は、古学派の本領である字句の厳密詳審な考証はもとより、篇全体を段落や章節ごとに区切って

それぞれの内容や特色を拾いあげながら全体を構造的に解明する点にある。視点の大きいものであった。『尚書考』『礼記抄説』に好例をみることができる。

わが国の漢学は老子や荘子といった諸子の研究に秀れた業績が多いのであるが、そうした中で終始経学研究に打ちこみ高いレベルの研究成果を残した昭陽の存在は特筆に価する。

本邦儒学の徒、学力ある者は伊藤仁斎父子、物徂徠に過ぐる者なし。亀井昭陽継いで起こる。その経説におけるや遠く伊物の上に出ず。但だ西陬に僻処し、その学僅かに一方に行われて広く天下に及ばざるのみ。

（『楠本碩水遺書』巻十一）

天保七（一八三六）年、昭陽没。享年六十七。(6)

亀井一門の学は、一族の曇榮、暘洲、大壮、大年、雷首、少栞、そして秋月の原古処、采蘋、吉田平陽、日田の広瀬淡窓等々に引きつがれるが、その悼尾を飾るものは通称「人蔘畑の婆さん」で知られる女流高場乱である。

なお東学問所修猷館は、明治四（一八七一）年、福岡藩の廃藩とともに廃校となる。

六

飫肥の伊東家に仕えた安井滄洲は、日向清武郷に居を構え、私塾を興して近隣に学行を以て聞こえたが、下級武士の故に家計は豊かならず、塾生を教える傍ら農業を営んでいた。その子息軒も十才をこえると朝早くから父と三才年長の兄清溪とともに畑仕事に精を出す日々であった。農事の際にも書物を懐にして休憩時に読みふけるのが常であった。息軒は幼時疱瘡を病んで満面アバタだらけ。身体も小さくすこぶる醜男であった。一方兄の清溪は身の丈けもスラリとした好男児でまことに対称的であった。悪童たちは悪口して「猿が本を読む、猿が往く往く」とはやしたてた。年十五、六の頃には家書を読みつくした。

文政三年、二十二才のとき、大阪の篠崎小竹に入門する。当時小竹は蔵書家として知られてい、「その門に入らね

ば書物を借さぬ由に付、同氏の門に摯をとり書物を借覧」（『谷干城遺稿』）した。そしてここで猛勉強する。四年秋兄清溪の突然の死により帰郷。

文政七年、息軒二十六才。江戸に出て古賀洞庵の門に入り、その推薦により昌平黌に入学。昌平黌は朱子学の殿堂で必ずしも息軒の奉ずる学問ではなかった。息軒の目ざす学問は二年後、松崎慊堂の門に入ることによって得られた。それは古学派系の漢唐注疏の学で一字一句をきびしく古代の原義において解釈し恣意的な理解を許さぬものであった。翌十年には藩主に従って帰国するので松崎門下での修学はごく短期のことであったがここでの研鑽は息軒の学問に確乎とした基礎を与えた。この年川添佐代と結婚。

清武の滄洲の塾も盛況で、門生数名が発議してここに正式の学問所を創建したいと藩に願い出、許されるとさっそく教堂を建て「名教堂」と名づけた。この名教堂の評判が影響してか、天保元年飫肥に藩校設立の議が下り、翌年竣工。振徳堂と命名。総裁兼教授に滄洲、助教に息軒、その他五名が教職に任ぜられる。礼節秩序の遵守を軸に、古学派の主張に即した修己安民こそ道の実現と説いた。夏、滄洲一家は居を飫肥に移す。

天保四年、六年ぶりに息軒は藩主に従って江戸に上る。翌年帰国。従前通り振徳堂助教に復帰。同年七月再び江戸。八年昌平黌へ再入学。人材の乏しさを嘆く。米艦浦賀に来り、世上騒然。

これより先き体調をくずしていた滄洲は、六年七月没。滄洲には『滄洲詩稿』のほか紀行文、随筆等がある。父の死、藩の権要との衝突、師友の乏しさ、江戸往還のせわしさ、学問への憧れ、これらがないまぜになって息軒の心を苦しめ江戸への思いを募らせる。江戸での生活に目算があってのことではない。昌平黌に人材の払底していることも学制の紊乱していることも承知している。それでも息軒にとって江戸は自らを鍛える唯一の場であった。四十のいまこの情念を燃焼させなかったならば己れはこのまま朽ち果ててしまおう。恐怖にも似た思いであった。九年六月、意を決して藩職を辞し、家族を伴って江戸に移住。

江戸に移り住んで三年の天保十二年、息軒は私塾「三計塾」を開く。塾規の冒頭に「三計トハ何ゾ。一日ノ計ハ朝ニ在リ、一年ノ計ハ春ニ在リ、一生ノ計ハ少壮ノ時ニ在リ、諸生の晏起と春遊トヲ慮ルナリ」とある。何とも気取ら

ぬ名称だが、こうした率直さが息軒の面目であった。規則のやかましい塾であったが、都下では宕隠の晩香堂、金陵の逢源堂とともに名の通った塾であった。

天保末から嘉永にかけての十数年、息軒も幕府も多事多難であった。息軒は藩主とともに『論語』を読み『管子』を講じつつ、『読書余滴』『続読書余滴』を書き、時に房総を旅して海防上の知見を広め、飫肥に養蚕製糸、煙草栽培の技術を伝えて殖産の路を開き、一方で『靖海問答』『料夷問答』等の海防論を著して国防の要を説く。天保八年浦賀に米艦来航以来の緊張の産物である。この間幕府の外交交渉や国内政策の幾多の破綻失政をみてきた。もっと腰の据わった一貫性のある政治が望まれた。この頃慊堂の家で藤田東湖と知り合うが、東湖は地震により圧死。やがて安政の大獄、尊皇派の粛正、桜田門外の変へと続き、時世はいよいよ暗く切迫する。

一体息軒の生まれた寛政の頃から学問水準は全国的に平均化し、三都にのみ人材が存するわけではなく、思いもかけぬ僻村に瞠目すべき秀才が育ちはじめていた。三浦梅園などその好例である。かくして長年学界を牛耳ってきた林家は衰退し、自由に発想し研究を開示する諸学派が台頭林立する。

こうした状況の下で幕府としても思い切った手段を講ぜざるを得なかった。幕下の昌平黌振興のためである。松平春嶽がその中心で、改革の要となるものが、安井息軒、塩谷宕陰、芳野金陵らの儒官への抜擢であった。(7) 息軒自身は古学を専攻し、また私塾の経営、老齢等を理由に辞退を申し入れるが許されず、ついに承諾した。昌平黌に朱子学派以外の人物が任用されるのは前例のないことで、幕府の処置も大胆であったが、学力が当時に抜きんでていた息軒を、専攻はともあれ昌平黌に引き入れる必要に迫られていたのである。文久二年暮れのことである。この年の春、佐代夫人没。

息軒の著述は多い。天保十三年の『読書余滴』をはじめとして『続読書余滴』『書説摘要』『靖海問答』『料夷問答』『外寇問答』『軍政或問』『管子纂詁』『戦国策補正』『左伝輯釈』『論語集説』『辨妄』『睡余漫筆』そして没後に『息軒遺稿』『救急或問』『上明山公書』『毛詩輯疏』『北潜日抄』『論語集説』『孟子定本・大学説・中庸説』がまとめられ刊行される。

これらの著作のうちとくに注目されるのが、戊辰の際の漢文日記『北潜日抄』、藩主や塾生との討論の中から生まれた『管子纂詁』、安井の家の家学ともいうべき『論語』研究をまとめた『論語集説』の三書である。

『北潜日抄』は幕府滅亡の日々の記録として、また江戸郊外に避難した息軒の心情を知る資料として貴重であり、『管子纂詁』は誤謬甚だしい全書を考証修訂して通読の道をつけたもので日本のみならず中国においても評価が高い。『論語集説』について、服部宇之吉はいう。

「先生公ヲ執リテ好ム所に阿ラズ、能ク古今ノ長ヲ取リ短ヲ舎テ、考据最モ力メ、論断最モ慎メリ」（『漢文大系』四書解題）

息軒の一連の書にあてはまる評である。

〔注〕

（1）三浦叶「明治年間における日本漢学史の研究」（『明治の漢学』第五章）

（2）西村天囚『日本宋学史』二四〇頁

（3）同右　二七二頁

（4）内藤湖南『近世文学史論』（内藤湖南全集第一巻五八頁）

（5）廣瀬淡窓『懐旧楼筆記八』

（6）南冥・昭陽の著作の大部分は、『亀井南冥・昭陽全集』八巻九冊（葦書房刊）に収載されている。

（7）このとき京都にいた熊本藩儒木下韡村も同時に昌平黌教授に招かれるが、病気を理由に辞退し、即日帰郷する。農民出身の己れの才を認めた藩主への奉公がなお不十分としてである。以後藩の外へ出ることはない。見事な進退であった。

〔補注〕長崎針尾の楠本端山、碩水、日田の広瀬淡窓一門、安井息軒の外孫朴堂、熊本の竹添井井、鹿児島の重野成斎らも記述すべきであるが、後日を期したい。